

心理学と科学 ―その現状と展望

荒川 歩

(名古屋大学 大学院法学研究科)

「自己紹介」と「今回の話の内容の目次的説明」

名古屋大学・大学院法学研究科の荒川歩と申します。所属は法学研究科になっていますが、心理学の出身ですし、今も主に心理学を仕事にしています。今日は心理学と科学というテーマでお話ししたいと思います。

最初に結論から言いますと、私は、質的研究は「科学」ということにこだわるのは良くないと考えています。そこで、今回のお話は、3つのパートにわけてこの問題を論じたいと考えています。まず第1に、心理学は科学的でなければならないのか？科学的であることで何を失ったか？ということについて考えます。第2に、質的心理学は科学でなくともいい可能性について考えます。そして最後に、もし質的研究が科学でないとしたら、質的研究は何を羅針盤に進めばいいのかについて考えます。どうぞ宜しくお願いします。

心理学は科学的であることにこだわることで何をとらえ損ねてきたのか？

心理学は科学なのでしょうか？これに関連して、松井(2000)は心理学の授業の受講前と受講後の心理学のイメージの変化を検討しています。この研究で、受講前の心理学のイメージのトップ5は、「心がわかる」、「おもしろそう。興味深い」、「難しそう」、「カウンセリング、カウンセラー」、「犯罪捜査」なのですが、これが受講後には、「科学的」、「人間の行動や感覚に理由を与える体系的な理論」、「面白い、魅力的、楽しい、興味がわく」、「不思議、神秘的」、「人の心を見抜くようで怖い」に変わっています。これには2つの解釈がありえると思うのです。1つは、心理学は科学的であり、学生がそれを理解した、という解釈、もう1つは、教員が科学的なイメージを強調した、という解釈です。

少なくとも、心理学は、この科学的というイメージを強調する傾向はあると思います。

例えば、「心理学」の代わりに「心の科学」という言い方をすることもありますし、多くの大学の心理学研究室のウェブサイトでは、心理学が科学であることを強調しています。例えば、私が元所属した大学でいうと同志社大学の心理学研究室のウェブページ(<http://psychology.doshisha.ac.jp/Department/top.html>)では、「心理学はこころと行動のサイエンスです。」と書かれていますし(2007年4月7日確認)、立命館大学の心理学研究室のウェブページ(http://www.psy.ritsumeit.ac.jp/p_guide.html)には、「心理学は「心の科学」、「行動の科学」として確立されてきた学問です。」(2007年4月7日確認)と書かれています。また、2005年版の「日本心理学会 執筆・投稿の手びき」には、「科学論文」という表現が3回出てきます。ちなみに、APA(アメリカ心理学会)のウェブページ(<http://www.apa.org/about/>)には、確かに、“Scientific”という言葉が出てきますが、心理学の定義として載っているのは、“Psychology is the study of the mind and behavior.”となっています。つまり科学(“Scientific”)という言葉は入っていないんですね。これは面白いことだと思います。

では、なぜ心理学は「科学」ということを強調するのでしょうか？おそらくそれにはつまり現状と歴史とが背景にあると思います。その一つは、学問としてのプライドの問題、つまり非心理学者の「怪しげな」心理学イメージに対する自尊心の確保のためというものです。もう一つは、学問になるための構造の問題、心理学発生の過程における自己不信感のためというものです。

学問としてのプライドの問題に関して、Senter & Dimond(1976 依田(編訳) 1980)は、下記のような心理学のイメージを指摘しています。

たとえば、心理学者が社交上見知らぬ人と会話をすると、次のようになる。まず、『あなたはどんなお仕事をなさっていますか』と質問される。心理学者が、『私は心理学者です』と答えると、相手は次の反応のうちのどれか1つをすることが多い。

1. あわてふためいて、急いで弁解し、そのあと姿を消してしまう。
2. 反応は1の人に非常に似ているのであるが、姿を消してしまうかわりに、数分後に、いやがる配偶者を引っばってきて、「彼女(あるいは彼)の精神分析をしていただけませんか」と頼む。
3. 落着きをなくして言う。「あなたが私を正しく見抜けるかどうか賭けましょう。私の心をあなたは正しく読みとることが出来ますか。どうです。」

(Senter & Dimond, 1976 依田(編訳) 1980)

このようなイメージを持たれるのが不本意なので「科学的である」と強調するわけです。

学問になるための構造の問題に関して、サトウ(2004)は、もともと心理学が発生してきた理由の一つに、知識や感覚と事実の矛盾の問題(錯覚の問題)があったことを指摘しています。つまり、それまで自分の感覚(外部世界)と知識とは一致しているということを前提に、テーブルの前で考えることで、哲学を発展させてきたのですが、錯覚という現象が

明らかになると、自分の感覚というものを疑わざるを得なくなった。最初に、自分の知識や感覚を否定することから、哲学の科学化である心理学が始まったわけです。

こういう事情を背景にして、現在の心理学では、科学的な方法として、研究者の感覚や主観を排した研究法が用いられています。基本的には、「数量化」、「客観化」、「機械化」、「解釈の排除」、「演繹」といったものが「科学」っぽくするためのキーワードになるかと思います。この「機械化」というのは、できるだけ機械を使ってやると「科学」っぽくなるというもので、たとえば、できるだけ仰々しい機械を使ってやるとそれだけで科学的な研究をしているように見えるんですね。人の手が入らないということは、科学の条件であるというイメージがあるわけです。たとえば、日本の心理学の祖である元良勇次郎 (1907, p.32)は実験心理学を「機械を用ゐて心の内部を研究す」る学問と定義していたりします。

そして、『『科学』による人類の繁栄』という言説を背景に「科学的」というパワーを持った言説と距離をとるのはきわめて難しいというのが現状です。「ロケットが宇宙を飛ぶのも病気が治るのも科学のおかげ」なのだから、心理学は科学的でなければならないと言われるわけです。しかし、正直なところを言えば、僕のようなポストバブル世代は、そこまでピュアに信じられない(^_ ^;)。科学が正しいって言ったって、結果的に正しかったものを科学とし、結果的に正しくなかったものは手続き的な間違いや個人の責任に還元してきただけではないかと思ってしまうわけです(荒川, 2007)。

ここで、心理学をご存知ない方も、いらっしやと思いますので、心理学でいう科学的研究というものがどういうものかをご説明しましょう。心理学の研究の1つのパターンは実験研究というものです。簡単に説明すると、ある集団からランダムにサンプリングして、それをランダムに2つの群に分けます。そして実験的にAという操作を加えた群(実験群)とその操作を加えなかった群(統制群)とで、特定の行動や心理状態に違いがあるかどうかを検討するわけです。例えば、ある実験をおこなって、ある心理的状态や行動を測定した結果(従属変数)、それが Figure 1 のようになったとします。すると、心理学者は、統計的検定をかけて、両者の平均値に統計的に有意な差があれば、実験的操作の要因は、統計的に有意に影響した(=「確かなもの」)と考えるわけです。この場合、統計的な差が出た方向と違う変化を示した人がいたとしても、それは誤差や外れ値として扱われます。

このような心理学の「科学的」研究には、2つの特徴があります。第1に、確率論が基盤にあることです。第2は、関係があることを指摘することが目的であり、予測力は議論されないことが多いことです。

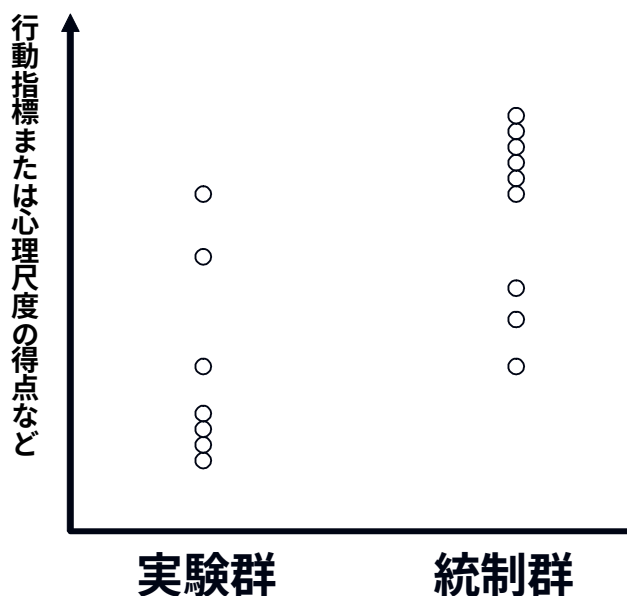


Figure 1 量的研究の実験結果の例

しかし、それは、あまりに多くのものを失わせることになりました。ここでは、時間・リテラシー・現場性・他の価値観(正義・責任など)の4点に絞って説明します。

第1は、「時間」です。自然科学を模そうとした心理学には、自然科学と同様に、時間の「ある概念」がかけています。第1の時間、それは事象が起こる前の時間です。第2の時間、それは事象が起こった後の時間です。科学では、普遍的法則を求めるので、時間は関係ありません。見出された法則は、過去にも将来にも起こりえることなのです。もし、人が、自然科学の対象の多くのように、数であり、繰り返し(または逆戻り)可能ならこのことは問題にはなりません。しかし、人の人生が固有であり、一度きりで一方向的である(ペルクソンの)時間である限り、その影響は甚大です。

第2は、「リテラシー」です。心理学では、「**の人は、一般的(統計的)に**の傾向がある」、「**の場合には、人は**する傾向がある」という言い方を頻繁にします。たとえば、「人と話す時に髪に触っている人は不安が強い」のように使います。これは心理学がよく批判する血液型性格診断の枠組みである「A型の人は、几帳面な性格が強い。」という語り口と同型のものです。検証されたかどうかというよりも語り口自体が問題なのだと思います。その証拠に実験心理学の知見にあわない人が出てきた際、「心理学は一般的な傾向を研究するもので、多くの人がそうだというだけで、中には例外的な人もいます。」という

言い方がなされます。つまり、本当に実践的介入をしようと考えた時には、知見が得られた母集団と対象とが完全に等質かという判断が必要になるわけです。これは、後述する心理学の実践性の乏しさにも繋がってきます。

もし心理学が、人々の生活に直接的に関係していなければ、このようなことを考える必要はないかもしれません。なぜこのようなことを考えるリテラシーが必要なのかというと、心理学的な知識は、食品に関する知識と同様、生活に密着するものも多いため、流布する言説のコントロールは必要だからです。にもかかわらず、知識の生産・流通・消費というプロセスを考えたとき、日本の心理学の大学院では知識生産の方法の教育だけに重きがおかれ、流通・消費プロセスに対する教育が皆無に等しいというのが現状です。その背景には「科学的研究の結果」＝「正しい！！」＝「流通され、消費されるべきもの」という非常に素朴に単純化された図式があるように思います。だからテレビ番組には心理学者がよく出てくるわけです。

第3は、現場性です。これは、特に教育心理学の領域で、「心理学的知識の不毛性論争」というのが、なされていきました。奈須・鹿毛・青木・守屋・市川(1993)によると、1964年～1993年の間だけで、20件ほども、心理学的知識が実践には不毛ではないかという趣旨のシンポジウムが開催されたそうです。奈須ら(1993)は、過去の実践性シンポにおける問題点を整理して、「科学至上主義」、「哲学・歴史性の欠如」、「社会性・責任性の欠如」の3点を指摘しています(p8)。ここでは、「科学至上主義(奈須ら, 1993, p.8)に着目して詳しく見ると、「客観主義」、「全体性のなさ、要約的」、「対象との関係のなさ、対象への無関心、対象を手段とみる視線」、「文脈性のなさ、生態学的妥当性のなさ」、「行為性のなさ、対策への無意識、無関心」(現象の単なる記述、メカニズムの解明)、「安易で無条件な一般化」が指摘されています。

第4は、他の価値観です。法学部にいると、1週間に一回くらい正義という言葉が聞いたりするのですが、心理学者は「正義」と聞くと笑うか、あるいは「倫理」のことだと考えます。心理学の価値観には、「科学」しかない。しかし、それだけでいいのでしょうか？私は、心理学と正義との関わり、あるいは正義に限らず、他の価値観を心理学の中に取り込めないかと考えています。たとえば、正義に関して言えば、短いスパンでの正義(今ここに起こっている不正義と戦う)と、長いスパンでの正義(不正義に気づくためのもの)の両方を考える必要があると思います。単純に「人の幸福のために」という以上に、「科学的研究」とも矛盾のない洗練した正義論を確立する必要があるのではないのでしょうか？

質的心理学は科学でなくてもいいという可能性について

さて、これまで、心理学が科学であろうとしていること、そうすることで何を失ってきたかを説明してきました。では、このような心理学の科学主義に対して、質的研究とは、どのような学問なのかということについてお話ししたいと思います。

前述の状況を背景に、特に現場心理学(やまだ, 1997)と密接に結びつく形で、近年質的心理学が日本でも一つの勢力になってきました。例えば2002年には「質的心理学研究」が発刊され、2003年には、日本質的心理学学会が設立されました。その背景にあったのは、対象を理解したい、現場に密着して研究し、それを伝えたいという要求であったと思います。

ご存じない方もいらっしゃると思いますので、質的心理学研究の特徴についても、私なりにまとめて説明します。質的研究の場合、仮説を持たずに現場に入り、その現場の中の意味を取り出すという作業をすることがあります。形式的にはインタビューの言葉の抜き書きや、観察した結果の分類、KJ法などによる整理という形式でなされることが多いです。その特徴は、帰納的、全体的、現場密着的、社会構築主義的、目指すのは「真実」というより視点の増加という事なのだと思います。

このような特徴をもつ質的研究は、量的研究とは評価基準においても違うことが指摘されています。Table 1は、サトウ先生がまとめられた質的研究の評価基準と量的研究の評価基準の違いです(サトウ, 2004)。量的研究の「客観性」の代わりに「再現可能性」・「反証可能性」、量的研究の「信頼性」の代わりに「確実性(手堅さ)」・「監査可能性」、量的研究の「内的妥当性」の代わりに「有意義性」・「真正性(迫真性ではなく)」、量的研究の「外的妥当性」の代りに、「転用可能性」・「一般化限定性」という概念を提案しています。

このような考え方は、もちろん量的研究から批判を浴びていて、「実証的ではない」とか「主観的だ」とか、要するに、「科学的ではない」といわれることがあります。しかし、私は、質的研究は科学的であることにこだわる必要はないと考えています。科学が唯一の正しい答えであると錯覚してしまいがちですが、それに少し距離を置くべきだと思います。そもそも質的研究と科学的な研究とは、その目的が異なるからです。科学的研究では、「時間」の概念を捨象した普遍性・科学的真実を求めるのが目的ですが、質的研究では、「時間」の概念を重視、時間は一方向に一回しか流れないものとして、その現場にフィットした知識を求めるのが目的とされています。質的研究が科学的であるためにこの目的を失わなければならないのであれば、質的研究は科学である必要はないと思うのです。

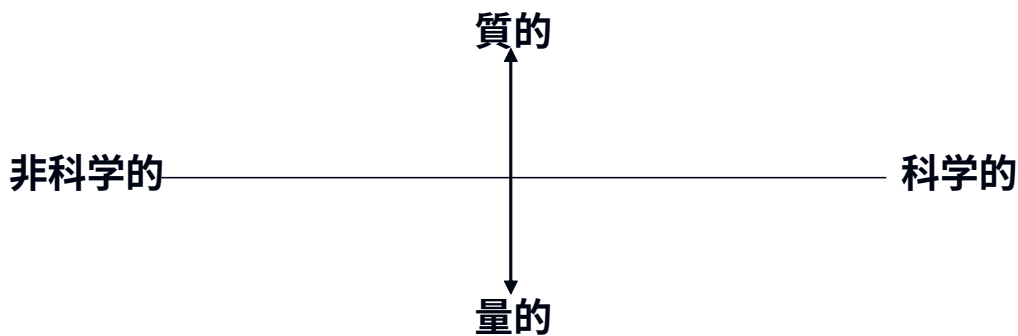


Figure 2 質的—量的研究と、科学—非科学のマトリックス

Table 1 質的研究の評価法(サトウ, 2004 より転載)

従来の概念	提唱したい概念
客観性 信頼性 内的妥当性 外的妥当性	再現可能性・反証可能性 確実性(手堅さ)・監査可能性 有意味性・真正性(迫真性ではなく) 転用可能性・一般化限定性

ただ、ここで念のため、確認しておきますが、私は「科学」を否定しているわけではありません。伝統的な「科学っぽさ」だけが価値観として支配していることに対して不安を抱いているだけです。「科学」という言葉と距離をとることと同時に Figure 2 のような4つのマトリックスを考える必要もあると考えています。

もし質的研究が「科学性」を追及するなら、科学の枠組みを変えるのではなく、従来の科学性の評価概念を維持すべきだと考えています。科学を名乗るために、科学の意味するものが一層曖昧になること(いわゆる科学の安売り)は、ユーザーにとってもっとも害になるでしょう。もちろん現在でも科学の概念が意味するものが明確だとはいえないかもしれませんが・・・。

質的研究における羅針盤の提案

では、科学的であるという規準を失った質的研究は、何を目指せばいいのかというと、私は、未来予測志向的研究—可能態暗示志向的研究という枠組みで考えるのが適切だと考えています(荒川, 2006, 2007)。未来予測志向の研究とは何かというと、ランダムサンプリングと統計的検定によって、未知の集団あるいは個人の行動や心的状態を、できるだけ正

確に予測、制御しようとする、いわゆる量的研究・科学研究がこれまでしようとしたことです。それに対して、可能態暗示志向の研究とは、ある個の記述(あるいはある研究者に見えたある個)によって、これから起こりうる可能性の一つとして未来に投げることを目的とした研究です。この2つの利点と欠点について整理しましょう。

未来予測志向の研究の利点は、未知の集団に適用でき、効率的だということです。ただし、確率論に基づく場合は、具体的な対象に適用できない場合があります。いわゆる普遍言明を単称言明への適用する際の問題です。どのような研究目的の場合に向いているかというと、科学的真実の探求、政策決定、製品・技術開発などが挙げられます。

ここでは、知識が具体的な対象に適用できない場合があるというのを少し詳しく説明しましょう。これからお話しするのは私がよく使う例なのですが、ギリースという統計学者の本(Gillies, 2000 中山(訳) 2004)の中に出てきた例です。その本の中には、ギリースの姪として、フランチェスカという姪が登場します。このフランチェスカは、スクーター・バイクを欲しがっているのですが、事故を心配したギリースは、中古スクーター・バイクに乗る子どもが事故にあう頻度はとても高いことを指摘します。それに対してフランチェスカは、統計の信頼性を受け入れ、同級生2人が事故に遭ったこと、そのうちの一人は、危険な運転をしていたことを話します。それに対するフランチェスカの回答が気が利いています。「しかしフランチェスカはこの少女が余りに愚かであり、自分は決してそのようなことをしないとコメントした。彼女はスクーターを上手に操縦し、ヘルメットをかぶり、またその他すべての注意事項を守るので、事故に遭う確率は平均よりずっと低いだろうと。」と、こういうわけです。これは、未来予測志向的研究で産出される知識の前提となる、完全に同じ母集団を想定することがかなり困難な場合があることを意味していると思います。

他方、可能態暗示志向の研究の利点は、無理に具体的な誰かに適用しないこと、そして、法則ではなく、視点(ナラティブ・モデル)の提供をすることにあると思います。逆に欠点は、いわゆる「真実」ではないかもしれないし、そもそも「真実」を求めようともしていないこと、それがどれ位適用できるかはわからないこと(つまりあまりないケースなのか頻繁にあるケースなのかは検討しないこと)が挙げられます。向いている研究目的としては、当事者理解や、可能態の暗示、選択肢の明示化、リスクとベネフィットの明示が挙げられると思います。

可能態暗示志向なんて役に立たないと思われるかもしれませんが、世の中の知識の多くが質的で可能態暗示志向といえるのだと思います。例えば、ファッションモデル、まった

く同じような服を組み合わせる人はいないでしょうが、イメージとして参考になるわけです。ウィンドウショッピングも、店の窓に飾られた商品例を見て自分のイメージにあった店を探すのですが、窓に飾られたものは、何かをあらわすわけですね。

ここまで聞いてこられて、先ほど科学的であることにこだわらないということを申し上げてきましたので、「科学的でないのなら何でもありになってしまうのではないか」と不安に思われるかもしれません。今よりもますます非科学的で害になる研究が社会に出てしまうのではないかとされる方もいるでしょう。私は、「(知識についての)物語りのガバナンス」で、その問題を考えています。これは、知識を生産の段階(科学的か否か)ではなく、流通・消費の段階でコントロールしようというものです。つまり正しいからどこにどうやって流れてもいいというのではなく、その知識が信じられることによって、誰にどのような影響(リスクやベネフィット)があるかを勘案する必要を訴えるものです。

これは、人文・社会科学的な研究においては、特に必要なものだと考えています。なぜなら、人文・社会科学的な知識は、ときに知識の受容者の自己認識に関わるからであり、つまり知識の受け手にとって受容可能な知識形態である必要があるからです。このような場合、量的研究のように「一般的」・「例外」などの言葉で一つの生を制圧せず、ナラティブとして知識を扱う必要があると思います。

また、それとは別の次元で人文・社会科学において知識の流通・消費に配慮すべき網一つの理由は、そのような知識の流通・消費を扱ってきたのが他でもない人文・社会科学だからです。害を与える知識が物語りとして普及するのをコントロールするのも物語りなのです。

まとめますと、私は、質的研究は科学である必要はないと前節で言いました。そうではなかったとしても、良い可能態暗示志向型の研究であるべきだというのが私の答えです。そして、その際に重視するのは、「知識の真実性」ではなく、その流通・消費に関してもセンシティブであり、誰にとってリスク・ベネフィットがあるかということです。

まとめ

これまで、質的研究と科学の関係を議論してきました。私の立場は一言で言うと、質的研究、そして心理学は、「科学でなくても良い派」ということになります。科学という枠組みで見た瞬間、質的研究の面白いところが失われてしまうんですね。その面白いところを失わないで欲しいというのが私の気持ちです。そして、「科学」という正しいっぽいものと

は、距離のとり方を考えないとどこか遠くにいてしまう気がします。

さて、先ほど、時間は一方向にして流れないという話をしました。今ここにいるわれわれの時間だってそうなわけです。少なくとも今現在、科学が過信されていない世界というのは、われわれの生とは連続性のない世界です。今の科学研究以外は認められにくい状況で、それなりに科学研究に意味を見つけてやっていく、そのような研究者の人生も、それはそれであるのだと思います。

引用文献

- 荒川歩 (2006). 「科学」に依存しない知識の可能性と物語りのリスク:「知識生産」を「フィードバック」から再考する 立命館人間科学研究, 11, 1-10
(http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hs/ningen/ningen_10/10_029-035.pdf) 【2007 年 4 月 7 日確認】
- 荒川歩 (2007). N B K(Narrative Based Knowledge)の発想 西條剛央他(編) エマージェンス人間科学 北大路書房
- Gillies, D. (2000). *Philosophical theories of probability*. Routledge
(中山智香子(訳) (2004). 確率の哲学理論 日本経済新聞社.)
- 松井三枝 (2000). はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化:「心の科学」受講前後の調査から 富山医科薬科大学一般教育研究紀要, 23, 63-68.
- 元良勇次郎 (1907). 心理学綱要 弘道館
- 奈須正裕・鹿毛雅治・青木紀久代・守屋淳・市川伸一 (1993) 教育心理学会第 34 回総会自主シンポジウム「教育心理学の実践性をめぐって」報告書. 教育心理学フォーラム・レポート, FR—93—003. 日本教育心理学会.
- サトウタツヤ (2004). 「心理学からみた質的研究」 学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ (立命館大学) , 7, 3-43.
- Senter, R. J., & Dimond, R. E. (1976). *Psychology: the exploration of human behavior*. Glenview, Ill.: Scott, Foresman.
- (依田明(編訳) (1980). 現代心理学 18 講 学習研究社)
- やまだようこ(編) (1997). 現場(フィールド)心理学の発想 新曜社